

資 料

台湾における看護・介護の実際と課題 —台北・花蓮・桃園の病院，大学，高齢者施設， 介護サービス事業所への訪問を通して—

Practice and Issue of Nursing and Care in Taiwan
— Through Visits to the Hospital, the Universities, Facilities for the Elderly Folk
and the Nursing Service Offices in Taipei, Hualien and Taoyuan —

吉岡 萌¹⁾，稲垣 絹代²⁾
Moe Yoshioka, Kinuyo Inagaki

キーワード 台湾，看護，介護，高齢者施設，外国人ケアワーカー

Key Words Taiwan, nursing, care, facilities for the elderly, foreign care workers

抄 録

背景 台湾は急速に高齢化が進むと予測されている。沖縄と台湾は古くからつながりがあり，身近な海外として交流しやすい状況にある。

目的 沖縄と台湾間での高齢者ケアの情報交換とネットワーク構築の示唆を得る。

方法 台北，花蓮，桃園の病院，看護大学，高齢者施設，外国人ケアワーカーの支援施設を見学し，高齢者福祉や看護の研究者，介護の従事者と面談し，情報を得た。

結果・考察 政権が変わり，高齢者福祉の政策やシステムが今から取り組まれようとしている。看護や介護の人材は育成されているが，労働条件の改善が必要である。認知症のケアなどもさらなる工夫が必要である。在宅高齢者の介護は多くの外国人ケアワーカーが担っているが，課題が多い。

結論 多方面から現在の台湾の看護・介護事情を知ることができ有意義なフィールドワークであった。高齢者ケアの質向上のために，沖縄，台湾間で意見交換や人材交流を進めていくことが必要である。

I. 緒 言

台湾の面積は36000km²で九州よりやや小さい。公用語は中国語である。人口は2015年現在約2349万人であり，うち高齢者は約293万人で，高齢化率は12.5%である。日本の高齢化率は2015年現在26.7%（内閣府，2016）であり，日本と比較すると台湾の高齢化率は低いが，2018年には14%，2022年には17.6%，2025年には20%を超えると推計されており，急速に高齢化が進むと予測されている。今年実施された台湾総統選挙では民進党の蔡英文が大差をつけて当選した。8年間続いた国民党政権から民進党政権に変わり，高齢者福祉政策に関して台湾は新たな局面を迎えている。

研究者が所属する名桜大学は沖縄県北部に位置

し，沖縄県でも特に過疎化と高齢化が進んでいる地域である。所属する高齢者・在宅看護領域では，以前から北部地域の看護・介護人材の不足を問題視してきた。沖縄と台湾は古くからつながりがあり，文化や産業の面で多くの影響を受けている。距離では飛行機で約1時間50分と近く，身近な海外として交流しやすい状況にある。沖縄県北部地域の高齢者ケアの課題の解決策を検討するためにも，台湾の高齢者福祉，看護，介護事情を視察することは意義がある。また，同じアジア圏の地域として，高齢者ケアの現状と課題を情報共有することは，互いの高齢者ケアの質の向上のために重要であると考えられる。今回，両者間の高齢者ケアの情報交換と交流のネットワークづくりを目的に係機関を訪問し，台湾の高齢者福祉，看護，介護

1) 名桜大学人間健康学部看護学科 Department of Science in Nursing, Faculty of Human Health Sciences, Meio University

2) 聖泉大学看護学研究科 Graduate School of Nursing, Seisen University

* E-mail yoshioka@meio-u.ac.jp

事情について有意義な情報を得たので報告する。

II. 方 法

2016年3月18日から6日間、研究者らは、台湾の看護、介護事情についての理解を深めるために、台湾の台北にある国立陽明大学看護学院、福祉事業団体、花蓮のキリスト教系病院付属の高齢者介護センター、桃園の移住労働者サービス・シェルターセンターを訪問し、関係施設を見学し、説明を受けた。

なお、関係機関には、見学と面談の依頼の際に口頭にて訪問や面談内容を元に報告書を作成することを伝え、了承が得られている。また、報告書等の概要を関係機関に送付し、内容に関しての同意も得られている。

III. 結 果 フィールドワークの実際

1. 台湾の看護教育と看護職の労働の実際

1) 台湾の看護教育の実際

台北の国立陽明大学は医科大学で、医学部、看護学部、歯学部などが設置されている。看護学部は1学年約40名であり、修士課程と博士課程がある。私たちが訪問した盧葦艷教授は、公衆衛生看護を担当されており、主に院生を指導している。台湾には看護の大学が12あり、専門学校は30ある。年間3500人が卒業するが、1800人しか働かない。就職をしない卒業生は大学院に進学したり、他の仕事をする。台湾では約26万人が看護の資格を持っているが、約15万人しか就業していない（中華民国護理師護士公會全國聯合會，2016）。給料は低く、仕事が大変なので離職率が高い。そのため、海外へ働きに行く看護師も多い。台湾の看護師は以前には米国や日本へ博士課程への留学をしていたが、ここ10年間で変わり、現在6大学で博士課程がある。台湾の医療保険では、東洋医学も診察が可能であるため、台湾の看護教育の特色として、西洋医学だけでなく、東洋医学もカリキュラムに組み入れているところもあるようだ。

大学の廊下に修士の学生の論文のポスターが張り出されていたが、全て英語であった。院生と出会ったが、みな若く、元気な人たちであった。盧教授の話では、修士課程に入学する者は新卒者が多いそうである。また、博士号を取得した学生は

教育機関に戻る学生が少なくないとのことであった。Nurse Practitioner（NP）は台湾で約4000人いるが、主に病院で研修を受けており、大学院での教育はない。盧教授としては、将来は看護の学会の認証にしていきたいとの思いがある。

2) 台湾の看護職の労働の実際

盧葦艷教授は看護師労働組合の委員長として看護師の労働条件や待遇改善にも取り組んでいる。病院で勤務する看護師の労働状況として、現在、毎日12時間勤務で月6日の休みである。組合としては月8日の休みを要求しているところだそう。また、夜勤手当の増額も要求している。台湾の看護職の労働環境は日本より厳しく、これでは働きたいと思うのかどうかと疑問に感じた。

2. 台湾の高齢者福祉施策と高齢者ケアの実際

1) 台湾の高齢者福祉施策について

今回台湾における、高齢者の福祉施策やケアの現状について話を伺った台北大学の王品先生は、老人学、社会福祉が専門である。台湾では、2009年に長期介護政策（介護保険政策）を導入しようとした。しかし、台湾では介護保険の政策を進めるための経験がないため、結局は発展せずに終わった。2016年5月に国民党政権から蔡英文の民進党政権に変わり、現在、高齢者福祉への新たな政策展開が期待されている。現に蔡英文は、「長期介護政策」を推進する切迫性を強調、それは今後、最も重要な政策の一つだとしている（Taiwan Today, 2016）。

台湾では、現在ケアワーカーが約35万人存在し、その約60%は外国人労働者で約20万人である。外国人労働者は個人雇いであり、政府が関与していない。台湾では移住労働者の受け入れが1992年から開始された。主な国はインドネシアやフィリピン、ベトナムであり、フィリピンは近年では雇用しづらい関係もあり、インドネシアが多い。外国人ケアワーカーの受け入れ当初はADLが重度の利用者が対象であったが、規制が緩和され、ADLが中等度でも利用が可能となった。現在は軽度～重度までのすべてのレベルに利用が可能となっている。

このように高齢者の介護を外国人労働者に頼っている状況であるが、今後高齢者が増加する中で現状のままでよいのかについて議論がされてい

る。国内で人材を育成する政策が求められている。しかし、現在10万人が介護の訓練を受けているが、74%は働いていない。それは、訓練後、ADLが重度の利用者の所で働く仕事は厳しく、辞めていくことが原因である。

台湾での介護の担い手は主に女性だそうだ。その担い手を介護から解放させることは、女性の社会進出にもつながり、また家庭の収入増加にもつながるため、家族介護者個人に介護を任せないような介護保険制度を導入し、家族介護者が利用しやすいサービスや制度にすることで台湾の経済発展にもつながる。つまり、女性の社会進出や経済の面においても介護保険制度を導入することはメリットがあると王先生は主張していた。台湾も日本と同様に近代化してきて、家族、特に女性が介護を担う生活形態の変化が望まれていることを実感した。

2) 高齢者ケアの実践

(1) メノナイト・クリスチャン病院シュウフェン分院認知症病棟、護理の家、デイサービスセンターへの訪問

本院のメノナイト・クリスチャン病院は台湾では1948年に花蓮の地に設立し、これまで68年の歴史がある。その分院であるシュウフェン分院は2010年に設立した、200床の急・慢性精神科と認知症患者のための病院である。身体疾患に対しては家庭医科、歯科、眼科、神経内科、神経外科、呼吸器内科、泌尿器科の診療科があり、透析センターも備わっている。病院内には140床の日間看護サービス（日本でいうデイサービスセンター）があり、併設施設に200床の護理の家（日本でいう、入居期間に制限がない介護老人保健施設のような施設）がある。現在、病院と護理の家しかないが、今後、介護老人福祉施設のような施設、幼稚園や退職者コミュニティ、研修教育センターなどが建てられる計画となっている。

私たちは、メノナイト・クリスチャン病院シュウフェン分院認知症病棟、護理の家、デイサービスセンターの3か所を見学した。メノナイト・クリスチャン病院シュウフェン分院には、48床の認知症専門病棟がある。台湾には、2015年時点では認知症高齢者の数が約24万人おり、全人口の約1%を占めている（社團法人台灣失智症協會, 2015）。日本は2012年の時点で約462万人おり（厚生労働省, 2014）、全人口の約3.6%を占めている。台湾

は今後さらに高齢化が進むと言われているため、日本と同様に認知症高齢者の数も増えることも予測される。認知症病棟の扉は暗証番号対応のオートロックで、スタッフしか開閉ができない仕組みになっていた。病棟の一角には、昔を懐かしめる写真や家具、日常生活品などが置かれていた。認知症高齢者への回想療法としてこのような一角があるのだと感じた。盧教授の話からも回想療法は盛んに行われていると聞いた。この病棟での認知症患者へのケアに、回想療法以外で音楽療法や手作業、運動療法、外出支援などを行っており、日本と同様に医師と相談して行われているそうである。病棟には監視カメラが設置されており、ナースステーションでいつでも様子をみることができる。患者のプライバシーに配慮して部屋には設置しておらず、廊下や広場に設置していた。日本と同じような床センサーもあり、こちらは移動の有無を知るだけでなく、転倒予防の意味でも使われていた。

次に訪問した護理の家は2014年に開設し、現在92名が入所している。入居者は車椅子移動がほとんどであるが、自走出来る人が半数、もう半数は自力で動けない人であった。建物内の廊下やホールはとても広く、4人部屋でもベッド間が広がった。反対に1人部屋は日本と同程度の広さであった。入居者が集まるオープンスペースでは、家族と話す人、音楽を聴く人など思い思いに過ごしていた。ある入居者に私たちが話を伺った際、彼女は日本統治時代に日本語教育を受けているため、「懐かしい」「日本の人に会えて嬉しい」と日本語で返事があった。日本と台湾との歴史のつながりを実感した。護理の家の4人部屋の料金は32000円/月（103040円）⁽¹⁾、2人部屋は36500-37500円/月（117530円～120750円）、1人部屋は42000-43000円/月（135240円～138460円）である。台湾には補助の制度はないため全額自己負担である。この施設は台湾の中では料金が高い方である。

デイサービスセンターを見学した際、30人程度の利用者がおり、講話を熱心に聞かれていた。現在70名の利用者で、半数は高齢者であり、疾患は認知症やうつ病、精神疾患が対象である。医師の診断があれば無料である。食事は自分で用意する必要があり、皆弁当を持参している。土日も利用可能で、バスにて送迎を行っているが、自宅ではなく、集合場所があるそうだ。一部の利用者が

黄色のベストを着用していたが、認知症の方がいなくなったときにわかるようにつけているのだそうだ。

デイサービスセンターに、付き添いの外国人ケアワーカーが3名いた。うち2名はフィリピンの出身であった。台湾では、デイサービスセンターにも家庭ケアワーカーが付き添い、排泄や食事、移動などの日常的なケアを行っている。日本の介護保険制度では、長時間ケアワーカーがそばに付き添う仕組みはないためデイサービスのスタッフがケアを行うが、台湾では異なっている。

(2) 新北市の長老会系の雙連社福慈善基金會の訪問から～

新北市の長老会系の雙連社福慈善基金會に高齢者在宅介護の状況を聞くために訪問した。最初に組織全体の説明とサービスの概要の説明を受けた。台湾全体で2000年から始まり、現在、通所事業（デイサービス100人、リハビリ60人）、訪問事業（ヘルパーと訪問入浴440人）を提供している。スタッフは全体で100人である。訪問した施設では、ヘルパーの訪問介護とケアプラン作成のサービスは始まっているが、今後、診療所、リハビリ、デイサービスを始める。また、400人の入所施設や重症者や認知症のための小規模多機能の施設を全国で66ヶ所建設予定である。

実際に訪問介護の女性のヘルパーの方に話を伺った。1日4人の訪問で、9時から20時がサービス提供時間である。ユニフォームを着用し、自分の原則は①いつまでも学び続ける②尊敬の心を持つ③家族に対しても尊敬の念を持つ④自分の健康管理に努める⑤贈り物はもらわない⑥時間に余裕を持って、交通事故に気をつける⑦観察をよくして、自立した判断ができるようにする⑧心から話や悩みを聞くことに努めるとノートを見ながら話していただいた。「苦労はないですか？」の質問には、「この仕事に誇りを持っているので、どんなことも苦労とは思いません」と力強い返事があった。

3. 介護現場における外国人労働者の労働の実際

桃園県にある移工服務暨庇護中心（移住労働者向けの相談シェルター施設）は、そこにシェルターがあるとはわからない外観であった。この施設は移住労働者の権利擁護の活動を行っている桃園縣

群眾服務協會（Serve the People Association: SPA）の施設の一つである。代表の汪さんから施設の概要や外国人労働者の現状を伺った。

1) 外国人労働者の契約の際の問題

台湾は1992年から外国人労働者の受け入れを開始した。主に男性労働者は漁業や産業の仕事へ、女性労働者は介護や家事支援（家政婦、身体介護以外のもの）と男女で仕事内容が分かれている。ある男性は介護職を志望していたが、仲介業者から農業を勧められた経験を持っていた。台湾では文化的に介護は女性がするものという認識があり、男性が介護職に就くことは難しい現状があった。

外国人労働者の問題として紹介費があると汪さんは言う。外国人労働者の自国で4.6万元（14万8120円）が徴収され、台湾に20万元（64万4000円）を徴収される⁽²⁾。そのお金を払えないものは仲介業者がお金を貸す。それを貸証明という。そのため外国人労働者は台湾に来た当初から借金がある。その他、台湾側に支払うものとして、サービスチャージという制度があり、これは3年で6万元支払う。

外国人労働者は正式な費用以外にも一時帰国の際など空港へのタクシー代を業者に支払わないといけない。契約中に自国に帰る場合は国に再入国のビザ代として（本来は無料であるが）業者に1000元（3220円）を支払わないといけない。自分で転職するときは、次の職場が見つかるまでに住むところがなければ、部屋を紹介され、そこでも500元（1610円）支払わないといけない。

2) 介護現場における外国人労働者の労働の実際

住み込みの労働者には、外出の禁止や職場でのセクシャルハラスメント（以下、セクハラ）や暴力、契約外労働の問題がある。セクハラのは加害者は、雇用主とケア提供者の高齢者の場合がある。高齢者からの暴力として、例えば杖を使って殴られたり、熱いお湯をかけられたりする。その原因に、高齢者には家族に見捨てられた怒りやコミュニケーションが通じないことへの怒りがあるそう。台湾の昔ながらの習慣として、親の介護は家族で行っていたため、施設に入ったり、家族以外にケアをされることは家族から見放されたと思う高齢者も多い。また言葉の問題として、フィリピンでは、共通語は英語であるため、中国語を学ぶ必要性が乏しく、移住前に中国語を学んできてい

る者もいれば、移住後勉強するものもある。

契約外労働の問題では、例えば雇用主の親戚・友人の家の掃除、契約業者が工場やホテルなど別の事業も行っている場合はその業務もさせられる。法律上、契約外労働は違法とされているが、行政側は外国人労働者の問題に関与することは消極的である。現場での問題を適切に対処しない理由には、行政側は外国人労働者を雇用している雇用主を恐れており、雇用主側は雇っている外国人労働者が辞めると、再度雇用するには法律上の手続きで時間を要してしまうため、手放したくないことがある。外国人労働者は政府からの保護もなく、弱い立場に立たされている。

労働基準法では週1回休めるが、外国人労働者の現場ではそれが守られていない。外国人労働者の給料は、2015年以前は15840元（51004円）であったが、それ以降は17000元（54740円）に上がるも、台湾人の最低賃金は20800元（66976円）で、それを満たしていない。政府の外国人労働者専用の電話窓口があるが、前述のとおり相談をしても解決はしてくれない。この電話が勞工局に回ってきて対応をする。職場で暴力やセクハラが起こった外国人労働者がシェルターに逃げてくる。この施設は雇用主と問題解決するまでの短期間の住む場所を提供している。近辺にインドネシアの労働者用のシェルターがある。出身国別でシェルターが作られていた。施設の運営費として、外国人労働者1名に対し、500元政府から支給され、また管理者に対して20500元の給料が支給される。運営費や食費にこの費用が使われている。外部資金は少ない。

約15名の外国人労働者に対して、様々な質問をした。台湾に来る前に自国の業者から台湾の実際について聞いたかどうかの質問に対し、ないというもの、あるというものの両方がいた。あるというものは、3年間台湾で働いた友人から「ただ我慢しなさい」と言われたそうだった。フィリピン人の性格として楽観的で苦しいことは伝えないため、台湾に来る前にはわからなかったと言う男性もいた。台湾に来て悪い思いだけをしているわけではないという女性もいた。その女性は、ある高齢男性を最期まで看取った。その現場での仕事が終わっても、その妻から時々顔を見に来るように誘われていて対象者とその家族との親密な関係性を築くことができていた。コミュニケーションが取

れないときは、対象者の声や行動をみることで推測をするそうである。彼らのほとんどは台湾に来る前に自国で介護の研修を受けてきている。短くて2週間、長くて6ヶ月の研修を受けた方もいた。研修内容は清掃や身体介護、家事であるそうだった。「今、帰りたいと思いますか」という質問に対し、「帰らない」「稼いでから帰る」という返事が多かった。

IV. 考 察

1. 台湾と日本での看護教育と看護職の労働状況の違い

先に言及したが、台湾は日本の九州と同じ広さのところに、看護師を養成するための大学が12、専門学校が30あると盧教授から伺った。現場で働いている看護師は約15万人である。日本は総人口1億2708万人に対して、看護職員就業者数は約160万人（厚生労働省、2016）であり、一概に比較はできないが、台湾の看護師数は少ないと推測できる。台湾での看護師と看護教育の調査から、台湾では看護師の教育機関の増加と就職先の減少により、看護系卒業生が供給過剰となっている現状を明らかにしている（宮崎、2010）。看護師の就職先が減少している原因の一つとして、台湾における看護職の必要性の認識が低いと考えられる。就職先が少なく、就職する学生も限られてくる現状では、大学側は高度な教育に価値をおくようになるはずで、現に訪問した国立陽明大学でも、卒業生がそのまま修士課程に進む傾向にあった。台湾において、看護職が現場で求められるように看護職自身が専門性を高めること、またケアの質の向上のために労働環境を改善すること、地域在宅で看護職が活躍できるような場を生み出していくことが必要である。

2. 台湾の高齢者ケアと外国人ケアワーカーの課題について

高齢者施設や移住者シェルターセンターの訪問、王先生の面談から、台湾で高齢者ケアを担う介護人材の課題が明らかとなった。国内での介護人材の育成をしても、介護現場の厳しさから離職する現状に対し、新人のケアワーカーは現場に出た時のリアリティショックを感じていると考えられる。リアリティショック緩和のための訓練過程

での教育、職場教育や労働環境の整備が必要である。

外国人ケアワーカーの課題に、契約外の業務や対象者・雇用主からのセクハラや暴力の問題、コミュニケーションがあるとわかった。コミュニケーションについて、移住労働者の調査から、移住労働者が就労当初に経験するのが、言語の壁や見かけの違いによって生じる入居者との信頼関係構築の困難であり、介護労働の基本を介護技術やルーティンワークに求めるとしても、入居者との信頼関係の構築には一定のコミュニケーション能力が必要とされ、その際には、スタッフによる介入やサポートを通じた帰属感の醸成のためのスキルが不可欠であることが明らかにされている（安里，2007）。台湾の外国人介護労働者の受け入れについての調査では、外国ケアワーカーを迎えた際は、1～3週間程度通訳を雇い、スタッフにより業務の説明や、最低限の中国語での会話を教える施設もあることを示している（大野，2010）。施設に就職の場合は、台湾人スタッフや同郷の同僚のサポートを得られる可能性があるが、在宅での雇用ではそのサポートが得られにくいため、対象者との信頼関係構築に困難を生じ、暴力の問題につながってしまうことが考えられる。そのため、施設においても在宅においても、言語への支援ができるような体制づくりが必要である。外国人ケアワーカーが異国の地で働き続けられている理由に入国当初の借金も関係するが、それ以前にケアをしたいという思いで続けている。その思いに見合う適当な給料と労働環境を整えることは、台湾の高齢者ケアの質の向上につながると考える。そのため、国を挙げての制度づくりや保障を検討し、看護、介護現場での教育を進めていく必要がある。

最後に、認知症病棟にも今回見学をさせていただいた。監視カメラやオートロックの扉など、認知症患者の人権が尊重されていない状況があった。認知症に限らず、すべての高齢者が安心し、尊重される環境づくりが行える看護師、ケアスタッフの育成が必要である。今後、沖縄と台湾で、高齢者ケアについて意見交換や人材交流を行うことで、両者間の高齢者ケアの質の向上を目指す取り組みを検討していきたい。

V. 結 論

今回のフィールドワークは、ツアーの企画とコーディネートを含めて、現地の方と再三の連絡を重ねたことで実現した。訪問先は看護大学教員、社会福祉政策の専門家、通所訪問事業所、入居施設も含めた病院、移住労働者シェルターセンターと多岐にわたり、多方面から現在の台湾の看護・介護事情を知ることができ、人材育成と確保の示唆も得られた有意義なフィールドワークになった。視察後、名桜大学にて地域の医療、介護の専門職に対し報告会を行い、参加者が台湾の現状を学び、自身のケアを振り返る機会となった。今回を第一回とし、今後とも台湾との交流を引き続き行い、互いの看護・介護の質の向上と労働環境の改善のための取り組みを少しずつ構築していきたい。

謝 辞

今回、フィールドワークの企画とコーディネートをしてくださった方々、ツアーの同行・通訳をしてくださった方々、訪問させていただいた関係者のみなさまには、多大なるご協力をいただき、感謝申し上げます。

補 注

- (1) 台湾元=3.22円で計算(2016年9月22日のレート)。以後、このレートで換算している。
- (2) この施設はフィリピン人労働者のセンターであるため、フィリピンのケースとして金額などは述べている。他国ではまた状況が異なることを記しておく。

文 献

- 安里和晃(2007): 高齢者介護のグローバル化とクロスカルチュラルケア, 龍谷大学経済学論集, 46(5), 225-240.
- 中華民國護理師護士公會全國聯合會(2016): 台閩地區護理人員統計表-105年8月, http://www.nurse.org.tw/userfiles/file/DataSearch/201608_台閩地區護理人員統計表_tradevan.xls, [検索日 2016年9月18日].

厚生労働省 (2014) : 認知症施策の現状について, http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000065682.pdf, [検索日 2016年 9 月18日].

厚生労働省 (2016) : 看護職員の需給に関する基礎資料, <http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-10801000-Iseikyoku-Soumuka/0000117665.pdf>, [検索日 2016年 9 月18日].

宮崎聖子 (2010) : グローバル化のもとでの台湾における看護教育と看護師, 国際ジェンダー学会誌, 8, 47-65.

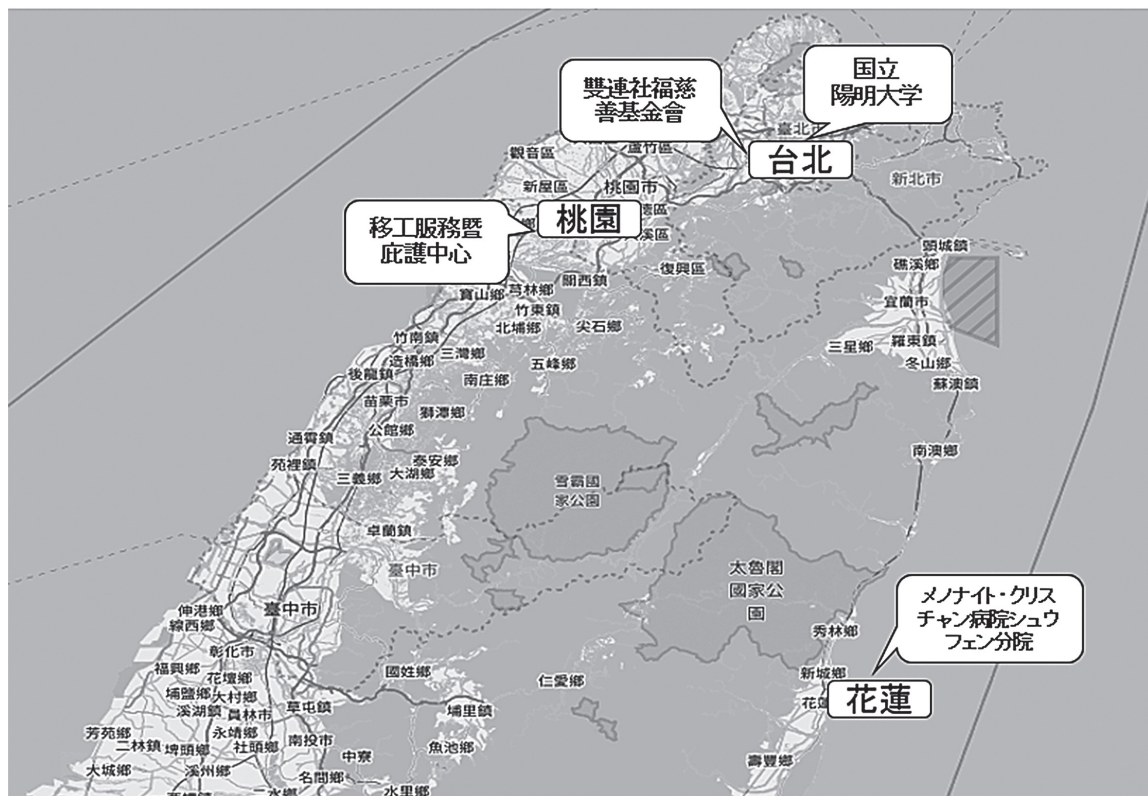
内閣府 (2016) : 平成28年度版高齢者社会白書 (全体版), <http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/>

zenbun/pdf/1s1s_1.pdf [検索日 2016年 9 月21日].

大野俊 (2010) : 岐路に立つ台湾の外国人介護労働者受け入れ—高齢者介護の市場化と人権擁護の狭間で—, 九州大学アジア総合政策センター紀要, 5, 69-83.

社團法人台灣失智症協會 (2015) : 認識協會 理事長的話, http://www.tada2002.org.tw/tada_about_01.html, [検索日 2016年 9 月21日].

Taiwan Today (2016) : 蔡英文次期総統が長期介護推進チーム設置の構想 2016年 2 月24日, http://www.roc-taiwan.org/jp_ja/post/27724.html, [検索日 2016年 9 月21日].



(C) OpenStreetMap contributors

図1 今回訪問した施設の地域 (台北, 花蓮, 桃園地域)

